

総称的条件文の意味的・統語的分析

森 創摩

【要旨】本研究は、一連の統語テストを通して、総称的条件文の条件節は予測的条件文の条件節と同じ統語的振る舞いをするということを検証する。総称的条件文と予測的条件文が統語的に同じ振る舞いをするのは、総称的条件文には予測的条件文と同じ性質の $p - q$ 間の因果関係があるからで、本研究は、総称的条件文 (と予測的条件文) は p と q との間に因果連鎖関係があることを意味特徴として持つ構文であると主張する。この意味特徴は、 $p - q$ 間に因果関係があることが必然的であることを捉えるもので、この意味特徴が条件構文に備わっているかないかによって一連の統語テストの結果を説明することができる。またさらに、総称的条件文は定義上は非予測的条件文に含まれるが、この意味特徴の有無により総称的条件文と非予測的条件文は区別できる*。

【キーワード】 総称的条件文, 予測的条件文, 非予測的条件文, 因果関係, 条件文の意味特徴

1 はじめに

Palmer (1988) によると、(1) の条件文は習慣的行為 (habitual actions) を表している (後ほど述べるが、(1) の ‘if’ は ‘whenever’ で置き換えることができ、(1) は ‘Whenever John comes, Mary leaves.’ と解釈される)。この (1) のように習慣的行為を示す条件文を Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は「総称的条件文」(generic conditionals) と呼んでいる¹。

* ご多忙の中、本稿を審査し、懇切丁寧なコメントと対応をしてくださった匿名査読者と編集委員の方々に感謝を申し上げます。本稿を執筆するに当たり、貴重な意見をくださった筑波大学の廣瀬幸生、加賀信広、和田尚明、島田雅晴、金谷優の諸先生に感謝の意を表したい。また、草稿の段階からいろいろと相談相手になってくれた納谷亮平氏 (現在、筑波大学助教) と本研究を長年応援し続けてくれた田中徹也氏と渡邊泰央氏に心より御礼申し上げます。彼らの協力がなかったら、本稿は完成しなかったかもしれない。この場を借りて感謝申し上げます。なお、本稿における不備は言うまでもなく全て筆者の責任である。

¹ Dancygier (1998) が (1) のような条件文を総称的条件文 (generic conditionals) と呼ぶの

- (1) If John comes, Mary leaves. (Palmer 1988: 153)

Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は、条件文の主要なタイプとして「予測的条件文」(predictive conditionals) と「非予測的条件文」(non-predictive conditionals) を認めている。以下の (2) と (3) がそれぞれ、予測的条件文と非予測的条件文の例である (予測的条件文と非予測的条件文についての詳しい説明は次節で行われる)。

- (2) If she comes I will tell her everything. (Declerck and Reed 2001: 231)

- (3) If Mary is late, she went to the dentist. (Dancygier 1998: 86)

総称的条件文は、先行研究における定義上は非予測的条件文であるが、Dancygier らが言うには、総称的条件文には予測的条件文のような条件節 - 主節間の因果関係がある。

本稿の目的は、一連の統語テストの結果を通して、総称的条件文の条件節は予測的条件文の条件節と同じカテゴリーであるということを示すことである。さらに本稿では、総称的条件文は予測的条件文と共通した意味特徴を持ち、その意味特徴とは、条件節と主節との間の因果関係は構文上必然的なことである、ということが明確化される。

2 先行研究 — 予測的条件文と非予測的条件文

前節でも言及したが、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は条件構文 (If p, (then) q) の主要な分類として予測的条件文と非予測的条件文を提示している。本節では、予測的条件文と非予測的条件文についての説明を行う。

2.1 予測的条件文

以下の (4) は一般には直説法 (Declerck (1991a, b) の言うところの開放条件) と呼ばれ、(5) と (6) は、それぞれ一般には仮定法過去、仮定法過去完了と呼ばれるものである。

- (4) If it rains, the match will be canceled.

は、(1) に見られる現在時制の用法は“generic” と呼ばれることがしばしばあるからである (Dancygier (1998: 63); cf. Fillmore (1990))。

(5) If it rained, the match would be canceled.

(6) If it had rained, the match would have been canceled.

((4) - (6): Dancygier 1998: 25)

Dancygier (1993, 1998) は、(4) - (6) のような例を予測的条件文と呼んでいる。彼女は、条件構文を予測的条件文と非予測的条件文とに下位分類し、このように分類する基準は「後方転移」(backshift) にあるとしている。彼女の枠組みにおいて、後方転移とは、動詞(句)によって標示 (mark) されている時制は実際に指示されている時間よりも以前を示すということである²。例えば、(4) において、rains は実際には未来時を指示しているが現在時制を標示している。また、(5) の条件節内の rained は未来時を指示しているが過去時制を標示している。さらに、(6) の条件節 (と主節) には (5) に類似した種類の後方転移が適用されている³。このように、条件節内に後方転移が適用された条件文を Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は予測的条件文と呼んでいる⁴。

予測的条件文について、Dancygier (1998) は、このタイプの条件文における p と q との関係は「因果連鎖」(cause-effect chains / causal chains) の知識を媒介としたものであると述べている。彼女の実際の言葉を引用すると、“what [the speaker] predicts is rooted in the knowledge of the present, and arrived at as the knowledge of consequences the present state of affairs may bring about via the knowledge of causal chains.” (Dancygier (1998:46)) である。

2.2 非予測的条件文

Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は後方転移を受けていない条件文を非予測的条件文と呼んでいる。Dancygier らの枠組みによると、非予測的

² Leech (1987, 2004) と Huddleston and Pullum (2002) も「後方転移」(backshift) という用語を出しているが、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) とは異なった意味で用いている。例えば、次の (i) における報告節内の動詞 understood は、‘I understand’ という文の後方転移されたものであるという。これは一般には時制の一致と呼ばれる現象である。

(i) Zoe said that she *understood*. (Leech 2004: 107)

³ Dancygier and Sweetser (2005) では、(4) のような条件節内における動詞の現在時制は“backshifting”、(5) と (6) のような条件節内の動詞形式は“distancing”されている、と述べられている。

⁴ Declerck and Reed (2001: 231) は、(4) - (6) のような例を条件文の「キャノニカル・パターン」(canonical patterns) と呼んでいる。つまり、予測的条件文とはキャノニカル・パターンをなす条件構文であるとも言える。

条件文は後方転移を受けず、非予測的条件文における動詞形式は、その動詞形式そのものが表す時間を指示する (Dancygier (1993: 417, 1998: 61, 62, 119), Dancygier and Sweetser (2005: 122))。つまり、非予測的条件文における動詞句は一般規則によって形成されている。ここでの一般規則とは独立節を支配する規則を指す (Dancygier (1998: 61))⁵。

Dancygier らは、Sweetser (1990) による「エピステミック的条件文」(epistemic conditionals) と「発話行為的条件文」(speech-act conditionals) を非予測的条件文の下位分類として認める立場をとっている。エピステミック的条件文の例として Dancygier らは以下の (7) と (8) を挙げている。(7) と (8) の条件節と主節は、両節とも通常の一般規則によって形成され、独立節と同じように解釈されるものである。

(7) If she is in the lobby, the plane arrived early. (Dancygier 1998: 62)

(8) If she is not at home, she went to the dentist as planned.

(Dancygier and Sweetser 2005: 113)

(7) と (8) の例では、主節によって表されている事態 (q) は条件節によって表されている事態 (p) より時間的に先行している。(7) と (8) の例に見られるように、典型的なエピステミック的条件文では、p は結果を、q はその原因を表し、話し手は結果から原因を推論 (reasoning) している⁶。実際、(7) と (8) の例はそれぞれ、‘If she

⁵ 予測的条件文と非予測的条件文を条件文の下位タイプと認めると、Huddleston and Pullum (2002) が出している以下の (i) は、後方転移されていないので、(i) は非予測的条件文と分類される。

(i) If he bought it at the price, he got a bargain. (Huddleston and Pullum 2002: 748)

Huddleston and Pullum (2002) はこの例 (i) を開放条件文としているが、(i) の if 節は (2) と (4) に見られる典型的な開放条件とは条件の性質が異なっていると言える。

⁶ Sweetser (1990) はエピステミック的条件文の定義を “[K]nowledge of the truth of the hypothetical premise expressed in the protasis would be a sufficient condition for concluding the truth of the proposition expressed in the apodosis.” (Sweetser (1990: 116)) と記述している。要するに、p が真であると知っていることは q という結論を下すための十分条件である、ということである (cf. Dancygier (1998: 87))。

また Sweetser (1990) は、以下の (i) を “If I know that they have to leave a message, then I conclude that he’s gone already.” とパラフレーズし、Dancygier and Sweetser (2005) は (ii) を “My knowledge that the typing happened is a precondition for my conclusion about the loving.” と説明し (下線は筆者による)、(i) と (ii) はどちらもエピステミック的条件文とされている。

(i) If they have to leave a message, (then) he’s gone already. (Sweetser 1990: 123)

is in the lobby, the plane must have arrived early.’ と ‘If she is not at home, she must have gone to the dentist as planned.’ と等しい意味を持つ、と Dancygier (1998: 88) では述べられている。また Dancygier (1998: 86) は、エピステミック的条件文には、p が原因、q が結果という因果関係はないようである (“[T]here seems to be no causal relation between the content of the *if*-clause and that of the main clause”) とも述べている。

一方、発話行為的条件文の例として、Dancygier and Sweetser (2005) では以下の (9) が挙げられている。

(9) If you need any help, my name is Ann. (Dancygier and Sweetser 2005: 110, 113, 114)

Sweetser (1990) によると、発話行為的条件文は、“[T]he performance of the speech act represented in the apodosis is conditional on the fulfillment of the state described in the protasis (the state in the protasis enables or causes the following speech act)” (Sweetser (1990: 118)) と規定されている。つまり、発話行為的条件文とは、主節で表されている発話行為の遂行は条件節で述べられていることの実現に依存するものである (cf. Van der Auwera (1986))⁷。また、Dancygier (1998) は、発話行為的条件文の *if* 節について、“[I]f-clauses can bear a relationship to the speech act performed in the main clause rather than to its propositional content” (Dancygier (1998: 89)) と述べている。つまり、発話行為的条件文の *if* 節は、主節の命題内容ではなく主節で遂行される発話行為と関わっているということである。また Dancygier and Sweetser (2005: 113) は、発話行為的条件文について “There is no predictive relationship” と述べ、発話行為的条件文には予測的条件文に見られる関係はないと述べている。これは、発話行為的条件文には p - q 間の因果連鎖はないと示唆する記述である。

3 予測的条件文と非予測的条件文の有効性

前節では、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) による予測的条件文と非予測的条件文を紹介した。本節では、予測的条件文と非予測的条件文という分類が他の先行研究のアプローチよりも条件文を分析するうえで有効であることを示す。そのために、Quirk et al. (1985)、Declerck (1991a, b)、そして Declerck

(ii) If he typed her thesis, (then) he loves her. (Dancygier and Sweetser 1997: 125, 2005: 117)

⁷ Sweetser (1990) によると、以下の例文 (i) の条件節は自分の意見を述べる (“state an opinion”) という発話行為を引き起こしているという。

(i) If I may say so, that’s a crazy idea. (Sweetser 1990: 118)

and Reed (2001) による研究を 3.1 節と 3.2 節で概観する。そして 3.3 節で、それらの研究の分析上の問題点を指摘し、後方転移を基準にした予測的条件文と非予測的条件文という分類の方が条件文を分析するうえで有効であるということを見る。

3.1 Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) は条件構文をまず「直接条件」(direct condition) か「間接条件」(indirect condition) かに分類している。以下の (10a-b) が直接条件の例で、(11a-b) が間接条件の例である。

- (10) a. If you put the baby down, she'll scream. (Quirk et al. 1985: 1088)
 b. If you ever touch me again, I'll scream. (Quirk et al. 1985: 1092)
- (11) a. She's far too considerate, if I may say so. (Quirk et al. 1985: 1089)
 b. If you don't mind my saying so, your slip is showing. (Quirk et al. 1985: 1095)

直接条件とは、(10a, b) のように、p と q との間に直接的因果関係のあるもので、間接条件とはそのような因果関係のない条件文である。実際、(11a, b) では、p が真であろうと偽であろうと、q は真であり、主節 q の内容が真実であることは p の内容に依存していない。

3.2 Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001)

Declerck (1991a, b) では、条件節の分類として「開放条件」(open condition)、「閉鎖条件」(closed condition)、「仮想条件」(hypothetical condition)、「反事実条件」(counterfactual condition) などの種類の条件が提示されている。開放条件とは、(12) の例に見られるように、p で表されている事柄の真否や成立について話し手の判断が関わっていない条件を指し、一般には直説法と呼ばれる (Quirk et al. (1985: 1091), Dancygier (1998: 34) を参照)。この (12) のような条件文は、Declerck and Reed (2001) では「開放 P 条件文」(open-P conditionals) と呼ばれている。

- (12) I will be happy if we find a solution. [開放条件・開放 P 条件文・直説法]
 (Declerck and Reed 2001: 54)

⁸ Quirk et al. (1985) は直接条件について “[T]he truth of the proposition in the matrix clause is a consequence of the fulfillment of the condition in the conditional clause.” (Quirk et al. (1985: 1088)) と規定している。

閉鎖条件とは、(13) のように、p の内容が文脈上既知で、話し手が p が真であると想定している条件を指し、このような条件文は Declerck and Reed (2001) では「閉鎖 P 条件文」(closed-P conditionals) と呼ばれている。

(13) A: (child in kitchen shouting to mother upstairs) Mummy, the kettle is boiling.

B: (mother) If the kettle is boiling you must take it off the fire.

[閉鎖条件・閉鎖 P 条件文] (Declerck 1991a: 193)

Declerck (1991a, b) は、p の内容が未来において実現されないだろうと話し手が思っている場合の条件を仮想条件と呼んでいる。そして Declerck は、p の内容が現在実現されていない、または過去において実現されなかったということを表している条件を反事実条件と呼んでいる。Declerck の分類では、(14) は仮想条件の例で、(15a, b) は反事実条件の例である。Declerck and Reed (2001) は、(14) と (15a, b) のような条件文をそれぞれ「暫定 P 条件文」(tentative-P conditionals) と「反事実 P 条件文」(counterfactual P-conditionals) と呼んでいる。

(14) If you parked your car there, it would be towed away.

[仮想条件・暫定 P 条件文・假定法過去] (Declerck 1991a: 194)

(15) a. You would not say that if you were older.

[反事実条件・反事実 P 条件文・假定法過去] (Declerck 1991a: 194)

b. I would have been happy if we had found a solution.

[反事実条件・反事実 P 条件文・假定法過去完了] (Declerck and Reed 2001: 54)

仮想条件 (暫定 P 条件文) と反事実条件 (反事実 P 条件文) はどちらも一般には假定法と呼ばれるものである。

3.3 Quirk et al. (1985)、Declerck (1991a, b)、そして Declerck and Reed (2001) における問題点と予測的条件文/非予測的条件文の有効性

3.1 節と 3.2 節で我々は、Quirk et al. (1985), Declerck (1991a, b), Declerck and Reed (2001) による条件文の分類方法を概観した。これらの研究にはいくつかの不備が見られる。例えば、Quirk et al. (1985: 1009) は、(16) - (18) のような if 節内に生起している法助動詞 will について、「現在時における予測可能」(present predictability) を表す場合であれば if 節内においても will は生起できるとしているが、これは、条件節内では未来を指示していても現在時制が使用されるというルールを守ろうとするあ

まり、このルールに対する例外的ケースを定めたものである (Leech (1987: 65, 2004: 64) を参照)。

(16) If the water **will** rise above this level, we must warn everybody in the neighbourhood.
(Quirk et al. 1985: 1009)

(17) If (as you say) he **will** be on holiday from tomorrow, I will try to contact him this afternoon.
(Declerck and Reed 2001: 149)

(18) If it'**ll** make you feel any better, we know now that it wasn't your fault.
(Declerck 1991a: 203, Declerck and Reed 2001: 160)

ここで問題なのは、直接条件を示す if 節内で **will** を使用できる例外的ケースを定めおきながら、if 節内で **will** を使用するとその if 節が直接条件とは言えない例があるということである。例えば、(16) と (16') の例を見てみよう。(16') の if 節内に **will** が生起している例が (16) で、(16') は直接条件を示し、(16') の p は q の命題を引き起こす原因である⁹。つまり (16') において、p は q の命題とつながっている。しかし (16) において、p は q を引き起こす原因というよりも、Declerck (1984: 290) と Haegeman (1984: 487) が言うように、p は主節 q を発話する動機づけ (motivation) として機能していると言ふべきである。このことから、(16) の p は q の命題ではなく q の発話とつながっていると見え、(16) は、(10a, b) や (12) のような直接条件の例とは p と q との間の性質が異なっていると見える (後ほど示すが、Dancygier (1993, 1998) と Dancygier and Sweetser (2005) の枠組みでは、(16) - (18) は非予測的条件文、(16') は予測的条件文で両者は異なった分類項目に属する)¹⁰。

(16') If the water rises above this level, we must warn everybody in the neighbourhood.
(Quirk et al. 1985: 1009)

⁹ Quirk et al. (1985: 1009) によると、(16') のような例 (直接条件) は信じがたい意味を表している文 (implausible sentence) であるという。

¹⁰ Declerck (1991b) と Declerck and Reed (2001) に基づくと、例 (16) は閉鎖条件/閉鎖 P 条件文ということになる。実際、Declerck (1991b) と Declerck and Reed (2001) は以下の (i) と (ii) の例を挙げて ((i) と (ii) は例 (16) に統語的・意味的に非常に類似している)、(i) と (ii) は閉鎖条件/閉鎖 P 条件文を表し、(i) と (ii) の p はすでになされた発話をエコーしているという。

(i) If the water level will rise as high as this, then we had better evacuate these houses.
(Declerck 1991b: 427)

(ii) If the water level will rise as high as this, then we ought to evacuate these houses.
(Declerck and Reed 2001: 150)

このような、直接条件を示す if 節内に *will* が生起すると直接条件とは言えなくなる例があるという問題が起こるのは、そもそも (16) - (18) のような例の適格性を保証するために、条件節内では未来を指示していても *will* ではなく現在時制が使用されるというルールに対する例外的ケースを認めたからである。我々は、*p* に未来を示す表現が生起してもいいことを前提とする分類方法を採用すべきであると言える。現に、すぐ後に提示する (19a, b) と (20) に見られるように、*will* とは別の未来表現も *p* に使用できるので、*will* だけを例外的に *p* で使用できると取り扱うべきではない。

次に、Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) のアプローチに目を向けてみよう。Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) の枠組みによると、(17) の if 節は閉鎖条件を、(18) の if 節は開放条件を表している。このように、Declerck と Declerck and Reed の分類の仕方では if 節内に助動詞 *will* が生起している条件文を一貫して説明することはできない。

また、Declerck and Reed (2001) によると、*will* 以外の未来時を指示する法助動詞は閉鎖 P 条件文の if 節内に使用できるとされているが (以下の (19a, b) を参照)、(20) のように開放 P 条件文の if 節内においても *will* 以外の未来を示す法助動詞は生起できる¹¹。

- (19) a. If, as you say, he **must** stay at home this afternoon, he won't be able to help me. (Declerck and Reed 2001: 204)
- b. If (as you say) you **would** be able to open my safe, it is time I bought a more sophisticated one. (Declerck and Reed 2001: 339)
- (20) I will come if it **would** be of any use to you. (Shiratani 1994: 95)

このように、Declerck と Declerck and Reed による条件の分類方法では、*will* だけでなく *will* 以外の未来を示す法助動詞が if 節内に使用されている条件文を一貫して説明することができない。

一方、Dancygier と Dancygier and Sweetser の枠組みによると、(16) - (18) の *p* は

¹¹ Declerck (1991a) と Declerck and Reed (2001) は以下の (i) と (ii) をそれぞれ開放条件、開放 P 条件文であるとしている。例文 (20) は (i) 及び (ii) と意味的にも統語的にも非常に類似している。ゆえに、(20) を開放 P 条件文として問題ないと言える。

- (i) I will come if it *will* be of any use to you. (Declerck 1991a: 206)
- (ii) I will come if my presence *will* be of any use to you. (Declerck and Reed 2001: 158)

後方転移を受けずに一般規則によって形成されているので、(16) - (18) は非予測的条件文である。実際、if 節内に「予測」の will が生起できるのは非予測的条件文においてのみである (“Only in a non-predictive conditional…can a predictive *will* occur in p”) と Dancygier (1998: 119) は述べている。また、(19a, b) と (20) のような、if 節内に will とは別の法助動詞が生起している例においても、p は一般規則によって形成されているので、非予測的条件文である¹²。

このように、Dancygier と Dancygier and Sweetser の予測的条件文/非予測的条件文という分類を用いると、未来時を指示する法助動詞 (will 以外の法助動詞も含む) が if 節内に生起している条件文は非予測的条件文であるという一貫した説明を与えることができる。

本稿では Dancygier と Dancygier and Sweetser の枠組みをもとにするが、なぜ彼女らの枠組みに立脚するのかというと、Declerck (1991a, b) と Declerck and Reed (2001) による条件文の分類方法は、p が適用される世界 (現実世界・可能世界など) や p の実現・非実現に対する話し手の判断・態度によって If p, (then) q という構造を細分化しようとするものであるが、Dancygier らが提示した後方転移という基準は、客観的な文法的制限で、if 節を形式的な側面に基づいて分類することが可能であるので (実際、条件構文をまず予測的条件文か非予測的条件文かにシンプルに分類することができる)、Declerck らの研究よりも条件文を客観的な基準でかつシンプルに分類することができるからである。また、Quirk et al. (1985) による分類方法とは異なり、非予測的条件文は will をはじめ未来時を指示する助動詞を p に使用してもいいということを前提としているので、will などの未来を示す助動詞が p に使用されている条件文例は予測的条件文の例外的ケースであるという取り扱いを受けない。これが

¹² 以下の例 (i) - (iv) においても p に will とは別の未来表現が使用されている ((i a, b) では *be going to*、(ii a, b) では *may*、(iii) では *might*、(iv a, b) では確定的未来を示す現在進行形が p で使用されている)。これらの例も、p は後方転移を受けずに一般規則によって形成されているので、非予測的条件文である。

- (i) a. If (you say) it *is going to* rain this afternoon, why don't we just stay at home and watch a video? (Haegeman 2003: 317)
 b. If you *'re going to* lose your temper, I'm not going to / won't play. (Huddleston and Pullum 2002: 211)
- (ii) a. If it *may* rain tomorrow, let's cancel the tennis game now. (岡本 2005: 160)
 b. If Paul *may* get drunk, I am not coming to the party. (Papafragou 2006: 1696, Portner 2009: 146)
- (iii) If you *might* buy a house in New York, you'd better consult Wendy. (Declerck and Reed 2001: 106)
- (iv) a. If the delegation *is arriving* tonight, we must see that we are ready to receive them. (Declerck 1991a: 200)
 b. If you *are coming* here on vacation next month, I hope we can meet.

予測的条件文/非予測的条件文という分類の持つメリットの1つである。

4 総称的条件文

Dancygier (1998) と Dancygier and Sweetser (2005) は、総称的条件文という種類の条件文を認めている。以下の (21) - (24) は、総称的条件文の例である。

- (21) He gets angry if I leave the house. (Dancygier and Sweetser 2005: 95)
 (22) If John comes, Mary leaves. (= (1)) (Palmer 1988: 153)
 (23) If I go into town, I take the bus. (Declerck and Reed 2001: 75)
 (24) She glares at me if I go near her desk.

(Oxford Advanced Learner's Dictionary, 6th ed.)

先行研究によると、総称的条件文における q は p の結果であると捉えられている (Palmer (1988: 153, 1990: 175), Sweetser (1990: 123-124), Dancygier (1998: 63), Declerck and Reed (2001: 74-75), Dancygier and Sweetser (2005: 95))。これは、総称的条件文の p と q は因果連鎖でつながった関係にあることを意味する¹³。

第1節で述べたように、総称的条件文は習慣的行為を表すものである¹⁴。実際、

¹³ Sweetser (1990) は、Dancygier らが総称的条件文と呼ぶ例 (e.g. (21) - (31)) を「内容条件文」(content conditionals) という分類に入れている (Sweetser の枠組みにおける内容条件文とは、 p と q との間に因果関係のある条件文を指す)。実際、Sweetser は、以下の (i) の持つ読みの1つに「内容領域」(content domain) の読みを認め、(i) を “Whenever, in the past, he was gone before their arrival, they were obliged to leave a message” (Sweetser (1990: 123-124)) とパラフレーズし得ると述べている。

- (i) If he was already gone, (then) they had to leave a message. (Sweetser 1990: 123)

¹⁴ 以下の (i) と (ii) の例の主節に注目すると、この例の主節は人間の習慣的行為を表すものではない。しかし、このような例も総称的条件文として扱われている。Dancygier and Sweetser (2005) によると、(i) は “in general, boiling of water is conditioned by heating to 100 degrees” と解釈される。

- (i) If you heat water to 100 degrees, it boils. (Dancygier and Sweetser 2005: 96)
 (ii) If you heat ice, it melts. (= (29)) (Dancygier 1998: 64)

また、Dancygier and Sweetser (2005) によると、総称的条件文の主節には一般に呼ばれるところの「習慣/習性/特性」の will が生起できる。以下の (iii) は総称的条件文で、(iii) の主節中の will は一般には「特性」と呼ばれる用法である。

- (iii) If you heat water to 100 degrees, it will boil. (Dancygier and Sweetser 2005: 100)

このように、総称的条件文の p と q は「人間の習慣的行為」の他に「物体・物質の特性」を表すことができる。また、次の (iv) - (vi) の例に見られるように、総称的条件文は「動

総称的条件文の主節は、次の (25) - (28) に見られるように **usually** や **always** といった副詞と共起できる。

- (25) If John comes, he **usually** works in the garden. (Palmer 1974: 140)
 (26) If John came, he **usually** worked in the garden. (Palmer 1974: 140)
 (27) If John comes, Mary **always** leaves. (Palmer 1990: 174)
 (28) If John came, Mary **always** left. (Palmer 1990: 174)

また、総称的条件文の中には、次の (29) - (31) のように ‘if’ を ‘whenever’ で置き換え可能な例がある。

- (29) If/Whenever you heat ice, it melts.
 (30) If/Whenever you press its tummy, it squeaks.
 (31) If/Whenever you pressed its tummy, it squeaked.
 ((29) - (31): Dancygier 1998: 64)

Palmer (1988: 153, 1990: 174) によると、このような例における ‘if’ は ‘whenever’ の意味を持っているように見えるが、この解釈は使用されている動詞が単純形であることによる。これはどういうことかということ、(29) - (31) の if が whenever で置換えられるのは、使用されている動詞が単純現在時制形式/単純過去時制形式という単純形の動詞の持つ特徴によるからであって、if 自体に whenever の意味があるわけではない、ということである¹⁵。

以上本節では、先行研究に従うと、総称的条件文は p と q が共に習慣的な行為を表す条件文であるということを見た¹⁶。

物の習性」も表すことができる。

- (iv) If you press its tummy, it squeaks. (= (30)) (Dancygier 1998: 64)
 (v) If you pressed its tummy, it squeaked. (= (31)) (Dancygier 1998: 64)
 (vi) The neighbor's dog barks at me if I go into my garden. (ウィズダム英和辞典第3版)

¹⁵ Dancygier and Sweetser (2005) は、総称的条件文の p と q は通例現在時制形式をとると述べているが、これは総称的条件文の p と q は現在時制形式をとる場合が多いということであって、(26), (28), (31) の例に示されているように、総称的条件文の条件節と主節には過去時制形式も使用することができると言える。

¹⁶ 総称的条件文が習慣的な行為を示すのに対し、予測的条件文は 1 回限りの行為を示すものである。実際、以下の (i) と (ii) の例に見られるように、予測的条件文は、tomorrow や tonight といった 1 回限りの行為を示すことのできる語句と共起できる。

5 総称的条件文についての議論

5.1 条件文における p - q 間の因果関係

2.2 節で、エピステミック的条件文と発話行為的条件文のどちらにおいても、非予測的条件文には、p が原因で q がその結果という因果関係はないということを見た。しかし、以下の (32) - (36) に示されているように、p - q 間に因果関係のある非予測的条件文の例がある。

- (32) If they caught the noon train, they will arrive at two. (Edgington 2003: 395)
- (33) If it's raining, we won't go to the park.
(→ 'Since it's raining, we won't go to the park.')
- (34) If John is rich, Mary will probably like him. (Tedeschi 1977: 632)
- (35) If my son is alive, I'll be so happy. (Smith and Smith 1988: 348)
- (36) If it is raining heavily now, I will go to the station to meet them.¹⁷

これらの例における p (と q) は後方転移を受けておらず一般規則によって形成されているので、これらの例は非予測的条件文である。そして、これらの例の p と q との間には因果連鎖でつながった関係があると言える。このように言える証拠として、p - q 間に因果関係のない非予測的条件文の if 節は only で修飾できないが ((37a, b) の対比例を参照)、p - q 間に因果関係のある非予測的条件文では、if 節を only で修飾できる ((38) と (39) の例を参照)¹⁸。実際 Edgington (2003) は、(32) は 'causal' であると述べ、また Comrie (1986) は、括弧内のコメントにあるように、(33) を since 節でパラフレーズしている。

- (37) a. **If you are hungry**, there are biscuits on the sideboard.
(Dancygier 1998: 90, 103, 124, Dancygier and Sweetser 2005: 40, 110, 113)

(i) If it rains *tomorrow*, the match will be canceled.

(ii) If she comes *tonight*, I will tell her everything.

¹⁷ 以下、出されている例文において引用元の記載されていない例 (脚注 12 の (ivb) と脚注 16 の (i) と (ii) の例も含める) は全てネイティブチェック済である。

¹⁸ 非予測的条件文の下位分類の仕方としてエピステミック的条件文と発話行為的条件文という分類が適切かどうかは問題だが、本稿の主眼は総称的条件文と予測的条件文が同じ振る舞いをすることを検証することであり、また本稿は、非予測的条件文というカテゴリー自体は否定しないので、この問題はまた別の機会に稿を改めて論じたいと思う。

- b. #There are biscuits on the sideboard, **only if you are hungry**.
 (38) They will get home by midnight **only if they left at nine**.
 (39) **Only if you are going to Bath**, can I give you a lift.

こうなると、総称的条件文の p と q との間の因果関係は予測的条件文と非予測的条件文のどちらの関係に近いのかが問題になる。すでに見たように、予測的条件文は p と q との間に因果連鎖でつながった関係がある (2.1 節)。以下の節では、条件文に統語テストをかけ (5.2 節)、その統語的データから、if 節のカテゴリーと総称的条件文 (及び予測的条件文と非予測的条件文) に備わる意味特徴について検討し (5.3 節)、そして総称的条件文の定義の仕方について本稿がとる立場を明らかにする (5.4 節)。

5.2 総称的条件文の統語的振る舞い

以下の (40) の例を見ていただきたい。(40) は Dancygier (1998) が総称的条件文として挙げている例の 1 つである。(40) の p と q に目を向けると、その動詞形式は、独立節 (“I drink too much milk” と “I get a rash”) を支配する規則に従っている。

- (40) If I drink too much milk, I get a rash. (Dancygier 1998: 63)

このように、総称的条件文の条件節と主節は後方転移を受けずに通常の一般規則によってその動詞形式が形成されている。ゆえに、総称的条件文は、定義上は非予測的条件文に含まれる。

しかし、総称的条件文は、以下の (i) - (iii) の統語テストに見られるように予測的条件文と同じ統語的振る舞いを示す。(i) - (iii) の統語テストにおける if 節の振る舞い方を見てみよう。

(i) 分裂文の焦点位置へ if 節を移動可能かどうか：

以下の (41) の例に示されているように、総称的条件文の if 節は分裂文の焦点位置へ置くことができる。

- (41) It is **if I drink too much wine** that I get dizzy. (Haegeman and Wekker 1984: 48)

予測的条件文の if 節も分裂文の焦点位置へ置くことができる (以下の (42) と (43) の例を参照)。

- (42) It is **if the student fails** that the teacher will fire the TA.
(Bhatt and Pancheva 2006: 647)
- (43) It is **if Bill comes home** that Mary will leave. (Bhatt and Pancheva 2006: 667)

一方、非予測的条件文の if 節は分裂文の焦点位置に置くことができない (以下の例を参照)。

- (44) *It is **if you like her so much** that you should invite her to tea.
(Haegeman and Wekker 1984: 48)

(41) - (44) の例から、非予測的条件文の if 節は分裂文の焦点位置へ移動できないが、総称的条件文の if 節と予測的条件文の if 節はどちらも焦点位置へ移動できると分かる。

(ii) Under what condition... で導かれる疑問文の答えになり得るか :

以下の (45) と (46) における B の発話はそれぞれ、予測的条件文と総称的条件文の if 節である。このように、予測的条件文と総称的条件文の if 節は単独で Under what condition... で導かれる疑問文の答えになり得る。

- (45) A: **Under what condition** will you invite her to tea?
B: **If I see her again.** (Haegeman and Wekker 1984: 49)
- (46) A: **Under what condition** do you get a rash?
B: **If I drink too much milk.**

一方、非予測的条件文の if 節は単独で Under what condition... で導かれる疑問文の答えになり得ない (以下の (47) を参照されたい)。

- (47) A: **Under what condition** should I invite her?
B: ***If you like her so much.** (Haegeman and Wekker 1984: 49)

以上から、予測的条件文と総称的条件文の if 節は単独で Under what condition... の疑問文に対する答えとなり得るが、非予測的条件文の if 節は単独で答えになり得ない、と分かった。これは、現象的には主節削除が可能かどうかという問題で、予測

的条件文と総称的条件文では **Under what condition...** で導かれる疑問文に対する答えとして主節を削除することが可能であるが、非予測的条件文では **Under what condition...** で導かれる疑問文に対する答えとして主節の削除は不可能であるという事実に戻元される。

(iii) if 節を 2 つ持つ条件文における if 節の生起位置 :

以下の (48) と (48') の例を見てみよう。

(48) You should meet her **if she comes tomorrow if you love her so much.**

(48') *You should meet her **if you love her so much if she comes tomorrow.**

((48) - (48'): 高見 1994: 79)

(48) の例は予測的条件文の if 節と非予測的条件文の if 節を含んでいる。このような if 節を 2 つ持つ条件文においては、予測的条件節 (**if she comes tomorrow**) は非予測的条件節 (**if you love her so much**) よりも主節に近い位置に生起しなければならない。実際、(48') のように、非予測的条件節を予測的条件節よりも主節に近い位置に生起させると不適格になる。

総称的条件文の条件節も、非予測的条件節と共に使われた場合、非予測的条件節よりも主節に近い位置に生起しなければならない。以下の (49) と (49') を見てこのことを確認しよう ((49) と (49') における **if it gets hot** は総称的条件節で、**if you are interested** は非予測的条件節である)。

(49) Metal expands **if it gets hot, if you are interested.**

(49') *Metal expands **if you are interested, if it gets hot.**

((49) - (49'): 中野 2002: 112)

(48) と (48') の対比から、予測的条件節は非予測的条件節よりも主節との結びつきが強いと言える。このことは、非予測的条件節は予測的条件節よりも階層構造上、より上位の階層に位置しているということを示している (実際、高見 (1994) は、(48) において、**if you love her so much** は X'理論上、**if she comes tomorrow** よりも上の階層に属していると論じている)。同様に、(49) と (49') の対比から、総称的条件節は非予測的条件節よりも主節との結びつきが強く、非予測的条件節は階層構造上、総称的条件節よりも上位の階層に位置している、と言える。

ここで追加して述べておきたいことが一つある。それは、総称的条件文の条件節

は予測的条件文の条件節と共起できないということである。というのは、総称的条件文の条件節は習慣的行為を表し、予測的条件文の条件節は1回限りの行為を表すものであるので(脚注16を参照)、これら2タイプの条件節が共起すると、習慣的行為と1回限りの行為とで衝突が起こるからである¹⁹。実際、以下の(50)と(51)の例は容認されない。

(50) *If I go to the party tomorrow, if I drink too much milk, I always get a rash.

(51) *If I drink too much milk, if I go to the party tomorrow, I always get a rash.

以上の(i)-(iii)の統語テストの結果から、総称的条件文は予測的条件文と同じ統語的振る舞い方をするとと言える。

5.3 条件文の意味特徴

前節では、総称的条件文と予測的条件文は同じ統語的振る舞いをし、その振る舞い方は非予測的条件文のものとは異なるということを検証した。このことから、予測的条件文のif節と総称的条件文のif節は同じカテゴリーであるが、非予測的条件文のif節は予測的条件文・総称的条件文のif節とは異なったカテゴリーであると言える^{20, 21}。

以上から、私は次のように考察する。予測的条件文と総称的条件文は、pとqとの間に因果連鎖関係があることを意味特徴に持つ構文である。これは、予測的条件文と総称的条件文ではp-q間の因果関係は構文上必然的なことである、ということの意味する²²。一方、非予測的条件文は、そのような意味特徴を持たない構文であ

¹⁹ Takami (1988) と高見 (1994) によると、総称的条件文のif節と予測的条件文のif節は同じ位置の階層に属している、ということになる。

²⁰ 条件節 - 主節という順序で並べたとき、予測的条件文と総称的条件文では、主節の前に‘then’を挿入することができるが(以下の(i)と(ii)を参照)、非予測的条件文には‘then’を挿入できない例がある(以下の(iii)を参照)。これも予測的条件文と総称的条件文に共通する振る舞いであると言える。

(i) If you go there, **then** I’ll go, too. [予測的条件文] (ルミナス英和辞典第2版)

(ii) If Mary bakes a cake, **then** she gives a party. [総称的条件文]
(Dancygier and Sweetser 2005: 151)

(iii) If you’re hungry, (***then**) there’s some food in the fridge.
[非予測的条件文/発話行為的条件文] (Declerck and Reed 2001: 364)

²¹ 総称的条件文におけるpとqとの関係について、Dancygier (1998: 63) は実際に“every occurrence of p can be predicted to bring about q”と述べている。

²² 以下の(i)のpは後方転移されているので、(i)は予測的条件文と言える。Dancygier and Sweetser (1997) によると、(i)には、湿気(humidity)とテレビの働き(TV’s functioning)

る。誤解が生じないように述べておくが、非予測的条件文は、p - q 間の因果連鎖関係がないことを意味特徴に持つ構文というのではなく、p - q 間の因果連鎖関係があることを意味特徴に持つ構文ではないということである。つまり、非予測的条件文は、p - q 間の因果連鎖関係を持つことが必然的ではない構文である。これは、非予測的条件文には p - q 間の因果連鎖関係のある例があってもいい (例えば、(32) - (36)) ことを含意する。ただ、その因果連鎖関係は非予測的条件文が構文上持つ意味特徴と関わるものではないということである。

(52) a. 予測的 condition 文と総称的 condition 文 :

- p - q 間の因果連鎖関係があることを意味特徴に持つ構文。
- p - q 間の因果関係は構文上必然的なことである。

b. 非予測的 condition 文 :

- p - q 間の因果連鎖関係があることを意味特徴に持つ構文ではない。
- p - q 間の因果関係は構文上必然的なことではない。

こう考えると、前節での 3 つの統語テストの結果は次のように説明される。まず、予測的 condition 文・総称的 condition 文の if 節は分裂文の焦点位置に置けるのに対し、非予測的 condition 文の if 節は焦点位置に置けないという現象は (統語テスト (i) の結果)、p - q 間の因果関係を意味特徴に持つ構文では p を焦点位置に置けるが、因果関係を意味特徴に持たない構文では、p は焦点位置に置けないと説明される。実際、以下の例に示されているように、因果連鎖を意味特徴に持つ構文において原因を示す節は焦点化できるが ((53a, b) を参照)、因果連鎖を意味特徴に持たない構文では原因に相当する節は焦点化できない ((54a, b) 参照)²³。

の間に何らかの奇妙な因果関係があるという。だから、(i) を聞いた者は、どんな種類のテレビが湿度により機能上の影響を受けるのだろうかかと不思議に思うという。一方、(ii) の文例は総称的 condition 文である。

(i) If it is humid, then the TV will work. [予測的 condition 文] (Dancygier and Sweetser 1997: 118)

(ii) If it rains, Tom practices tennis in the park. [総称的 condition 文]

上の (i) と (ii) に見られるように、予測的 condition 文と総称的 condition 文において、q は p から予測不可能な内容を表すことができる。これも、(i) - (iii) の統語テスト結果と同様に、予測的 condition 文と総称的 condition 文は p - q 間の因果連鎖関係を意味特徴に持つことの現れであると言える。

²³ 中右 (1994: 162) によると、(53a) の because は、命題内容成分として、客観的な事態間の因果関係を表しており、(54a) の because はモダリティ成分として、主観的な推論関係を表している。中右によると、(53) と (54) における (b) の文法性の差は because 節のモダリティ性に起因しているという。中右の枠組みでは命題内容成分のみが焦点化できるという。

- (53) a. He is not coming to class **because he's sick**.
 b. It's **because he's sick** that he's not coming to class.
- (54) a. He is not coming to class, **because his wife told me**.
 b. * It's **because his wife told me** that he's not coming to class.

((53a, b) - (54a, b): 中右 1994: 162)

次に、Under what condition...で導かれる疑問文に対する答えにおいて、予測的条件文と総称的条件文の主節は削除できるが、非予測的条件文の主節は削除できないという現象は(統語テスト(ii)の結果)、予測的条件文・総称的条件文ではpとqとの間に因果関係があることを意味特徴に持つので、主節qは削除できる(これは、主節qを削除しても、因果関係が保たれているのでpだけで原因を表す事象と理解される、ということの意味する)が、非予測的条件文は、p-q間に因果関係があることを意味特徴に持たないので、非予測的条件文の主節qは削除できない(これは、因果関係が保たれていないので、主節qを削除すると、pだけで原因を表す事象であるとは理解されない、ということの意味する)、と説明される。

統語テスト(iii)の結果である、予測的条件節/総称的条件節は非予測的条件節よりも主節との結びつきが強いという現象は、予測的条件文と総称的条件文はp-q間に因果連鎖関係があることを意味特徴に持つ構文であるが、非予測的条件文は、その意味特徴を持たない構文だから、と説明される。

このように、統語テスト(i)-(iii)の結果は、予測的条件文と総称的条件文はp-q間の因果連鎖関係があることを意味特徴とする条件文であるが、非予測的条件文はそのような意味特徴を持たない条件文であることの反映であると言える。

5.4 総称的条件文の定義に関する議論

5.2-5.3節で見たように、総称的条件文のpとqの動詞形式は後方転移されずに一般規則によって形成され、総称的条件文はその意味特徴により、pとqとの間の因果連鎖関係があることを必然的に持つ条件文である。pとqが一般規則によって形成されるというのは非予測的条件文の特徴であり、p-q間の因果連鎖関係を必然的に持つというのは予測的条件文の特徴である。このように、総称的条件文は予測的条件文の特徴と非予測的条件文の特徴のどちらも有する構文である。

以上から、総称的条件文は、pとqの動詞形式が一般規則によって形成され、かつpとqとの間の因果連鎖関係を必然的に持つ構文であると規定できる。第4節で見たように、先行研究では、総称的条件文はpとqが習慣的な行為を示す条件文で

あると定義されている。しかし本稿は、総称的条件文と呼ばれる文を、予測的条件文と非予測的条件文のそれぞれに備わる特徴を用いて規定する。これにより、先行研究よりも客観的な側面（一般規則によって形成されている p と q や因果連鎖関係という意味特徴）に基づいて総称的条件文を定義することが可能となる。そしてまた、総称的条件文の p と q が習慣的な行為を示すのは、p と q に使用されている動詞が単純現在時制形式/単純過去時制形式という単純形によるからであると説明される（第4節で言及したように、単純現在時制形式/単純過去時制形式の動詞は習慣的行為を表すことができる）。

以上本節では、予測的条件文と非予測的条件文に備わる特徴という視点から、総称的条件文の定義を検討した。

6 総称的条件文の仮定法

前節では、総称的条件文は予測的条件文と同じ統語的振る舞い方をし（5.2 節）、総称的条件文は、予測的条件文と同じように p - q 間の因果連鎖関係があると論じた（5.3 節）。このことと予測的条件文には仮定法の適用が可能であることから、総称的条件文も仮定法にすることが可能であると予想される。事実、総称的条件文の仮定法は存在すると言える（以下の例を参照）。

(55) If John comes, Mary always leaves. (= (27))

(56) If John **came**, Mary **would** always **leave**.

(57) If John **had come**, Mary **would** always **have left**.

((55) - (57): Palmer 1990: 174-175)

上の (55) は総称的条件文の例で、(56) と (57) は総称的条件文の仮定法の例である（(56) は一般に知られているところの仮定法過去の例、(57) は一般に知られているところの仮定法過去完了の例であると言える）。また、以下の (58) の例も仮定法総称的条件文である。(58) について Dancygier (1998: 33) は “[Sentence (58)] could describe Tom’s habitual behavior (as in *Tom wouldn’t be so hungry by noon every day if he had eaten a proper breakfast*).” と説明している。この説明記述は (58) が仮定法文であることの裏付けと言える²⁴。

(58) Tom **wouldn’t be** so hungry if he **had eaten** a proper breakfast.

²⁴ 例文 (58) は、if 節を予測的条件文の仮定法過去完了形式、主節を予測的条件文の仮定法過去形式とする解釈も可能である。

(Dancygier 1998: 33)

このように、総称的条件文を仮定法にすることは可能で、これも総称的条件文が予測的条件文と共有する側面の一つであると言える。本節では総称的条件文の仮定法を扱ったが、総称的条件文の仮定法は (52) を補強する言語的データであると言える。

7 結論

本研究は、総称的条件文の条件節は統語的には予測的条件文の条件節と同じ振る舞い方をするということを検証し、総称的条件文における $p - q$ 間の性質は非予測的条件文におけるそれよりも予測的条件文におけるそれと同じであると論じた。そして、本研究は、予測的条件文と総称的条件文は p と q との間に因果連鎖関係があることを意味特徴として持つ構文であると規定した。

本研究の意義は、一連の統語テスト (Heageman and Wekker (1984), Takami (1988), 高見 (1994), 中野 (2003), Bhatt and Pancheva (2006) らによる) を通して、総称的条件文は予測的条件文と同じ振る舞いをするを示しただけでなく、一連の統語テストの結果は、予測的条件文と総称的条件文は $p - q$ 間の因果連鎖関係があることを意味特徴とする構文であることの現れであると明確化したことにある。さらに本稿では、総称的条件文は、後方転移されていないので、定義上は非予測的条件文に含まれるが、総称的条件文は、 $p - q$ 間の因果連鎖関係を意味特徴に持つ構文であるので、予測的条件文の特徴を有する構文でもある、と規定した。

以上本稿は、予測的条件文・非予測的条件文・総称的条件文の 3 タイプの条件文について、因果連鎖と条件構文との関わり方に焦点を当てて検討し、3 タイプの条件文に備わる特徴を明らかにした。

参考文献

- 中野弘三 (2002) 「文の階層構造に基づく条件節の分析」『京都外国語大学 SELL19 重乃皓教授退職記念論文集』 97-115.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 東京: 大修館.
- 岡本芳和 (2005) 『話法とモダリティ』 東京: リーベル出版.
- 高見健一 (1994) 「言語の機能と階層性」 『言語』 23(3), 76-83.
- Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2006) Conditionals. In Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax*, Volume 1. Oxford: Blackwell. 638-687.

- Comrie, Bernard (1986) Conditionals: a Typology. In Elizabeth Closs Traugott, Alice Ter Meulen, Judy Snitzer Reilly, and Charles A. Ferguson (eds.), *On Conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press. 77-100.
- Dancygier, Barbara (1993) Interpreting Conditionals: Time, Knowledge, and Causation. *Journal of Pragmatics* 19, 403-434.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge, and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (1997) *Then* in Conditional Constructions. *Cognitive Linguistics* 8, 109-136.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2005) *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat (1984) 'Pure Future' *Will* in *If*-clauses. *Lingua* 63, 279-312.
- Declerck, Renaat (1991a) *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*. London: Routledge.
- Declerck, Renaat (1991b) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Declerck, Renaat and Susan Reed (2001) *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Edgington, Dorothy (2003) What if? Questions about Conditionals. *Mind and Language* 18, 380-401.
- Fillmore, Charles J. (1990) Epistemic Stance and Grammatical Form in English Conditional Sentences. *Chicago Linguistic Society* 26, 137-162.
- Haegeman, Liliane (1984) Pragmatic Conditionals in English. *Folia Linguistica* 18(3/4), 485-502.
- Haegeman, Liliane (2003) Conditional Clauses: External and Internal Syntax. *Mind and Language* 18, 317-339.
- Haegeman, Liliane and Herman Wekker (1984) The Syntax and Interpretation of Futurate Conditionals in English. *Journal of Linguistics* 20, 45-55.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey (1987) *Meaning and the English Verb*, 2nd ed. London: Longman.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (1974) *The English Verb*. London: Longman.
- Palmer, Frank R. (1988) *The English Verb*, 2nd ed. London: Longman.

- Palmer, Frank R. (1990) *Modality and the English Modals*, 2nd ed. London: Longman.
- Papafragou, Anna (2006) Epistemic Modality and Truth Conditions. *Lingua* 116, 1688-1702.
- Portner, Paul (2009) *Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Shiratani, Atsuhiko (1994) Three *Wills* in Futurate *If*-clauses 『活水論文集 (活水女子大学・短期大学) 37 英米文学・英語学編』, 79-100.
- Smith, Neil and Amahl Smith (1988) A Relevance-theoretic Account of Conditionals. In Larry M. Hyman and Charles N. Li (eds.), *Language, Speech and Mind: Studies in Honour of Victoria A. Fromkin*. London: Routledge. 322-352.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takami, Ken-ichi (1988) The Syntax of *If*-clauses: Three Types of *If*-clauses and X-theory. *Lingua* 74, 263-281.
- Tedeschi, Philip J. (1977) Complementizer and Conditionals. *Chicago Linguistic Society* 13, 629-639.
- Van der Auwera, Johan (1986) Conditionals and Speech Acts. In Elizabeth Closs Traugott, Alice ter Meulen, Judy Snitzer Reilly, and Charles A. Ferguson (eds.), *On Conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press. 197-214.

辞書

- 『ウイズダム英和辞典第3版』(2013) 東京：三省堂.
- 『ルミナス英和辞典第2版』(2005) 東京：研究社.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2000), 6th ed. Oxford: Oxford University Press.

A Semantic and Syntactic Analysis of Generic Conditionals

Abstract

This paper considers generic conditionals, which are presented in Dancygier (1998) and Dancygier and Sweetser (2005). This paper, confirming that the protasis of generic conditionals syntactically behaves similarly to that of predictive conditionals, shows that a generic conditional has a cause-effect impact on the relation between p and q. Additionally, the present paper argues that causality in predictive and generic conditionals is related to a semantic feature inherent in these conditional constructions. This feature ensures that predictive and generic conditionals must have causal chain relations between p and q.

In Dancygier (1998) and Dancygier and Sweetser (2005), generic conditionals are, by definition, included in non-predictive conditionals. However, the presence or absence of the semantic feature presented in this paper can distinguish between generic and non-predictive conditionals.

Key words:

Generic conditionals, Predictive conditionals, Non-predictive conditionals, Cause-effect relations, A semantic feature of conditionals

受領日 2020年9月3日
受理日 2020年11月15日